

# ヘンリー・フィールディングとジブシー王 『トム・ジョウンズ』における権力の寓話

圓 月 優 子

## 序

『トム・ジョウンズ』(*The History of Tom Jones, a Foundling*, 1749) 第12巻第12章において主人公トムがジブシーの王と遭遇するエピソードは、ナレーターとの絡みでみた場合、非常にユニークなものといえる。トムが旅の途中で経験する出会いは数多いが、他の多くのケースとは異なり、このジブシー王のエピソードは展開するストーリーの内容そのものとそれに付随するナレーターのコメントが齟齬をきたしているからである。ここでジブシーの社会はユートピアとして描かれ、この社会の綻びを匂わせるような描写は一切なされていない。ジブシーとの遭遇を体験するトムもそのユートピア社会を無条件で賞賛し、その賞賛がのちのち裏切られるといった顛末にもなっていない。それにも関わらず、このエピソードに続く形でナレーターがジブシー社会の絶対君主制を危険視する意見をながながと開陳するということを、どう解釈すればよいのだろうか。絶対君主制礼賛に対する警戒を意図するならば、何故ジブシー王をかくまで理想的な統治者として描くのだろうか。

そもそもここで興味深いのは、フィールディングがジブシーに関してちくはぐな二つのイメージを提示しているということである。『ジョウゼフ・アンドリュース』(*The History of the Adventures of Joseph Andrews, and of his Friend Mr. Abraham Adams*, 1742) や『エリザベス・カニング事件の真相』(*A Clear State of the Case of Elizabeth Canning*, 1753) といったパンフレットでは“Gypsies” もしくは “Gipsies” という呼称が用いられ、18世紀イギリス社会の秩序を揺るがせ害をあたえる余所者という単一のイメージでジブシーは表さ

れている。一方『トム・ジョウンズ』ではジブシーを初めて登場させるに際し“a Company of *Egyptians*, or as they are vulgarly called *Gypsies*” (XII. xii. 666) と二つの呼称をもって紹介していることから、ジブシーの起源をインドではなくエジプトに求めるということ、つまりジブシーとエジプト人を混同するという18世紀において一般にみられた錯誤をフィールディングも共有していたことがわかるのである。<sup>1</sup> 実際『トム・ジョウンズ』においてはジブシーに対し、反社会的な余所者というイメージに触れつつその上に古代エジプトの絶対君主制という包括的なイメージをかぶせている。フィールディングの知識は、古くはディオドロス・シクロス (Diodorus Siculus) やヘロドトス (Herodotus) といったギリシアの歴史家たちの書物や、1730年代・40年代に相次いで出された書物における古代エジプトに関する記述から得たものと考えられるのだが、<sup>2</sup> 彼がここで描くところのジブシーは錯誤に基づいたひたすら観念的な産物なのであって、現実の「ジブシー」としてはあり得ない存在なのだ。

観念的に記号化された存在としてのジブシーは、何を示唆するのだろうか。『トム・ジョウンズ』におけるジブシー王の挿話の意味をさぐることによって、王が体現する社会の統制あるいは「権力 (authority)」のありようについてのフィールディングの考え方を整理し、さらにそれが小説における「語りの権威 (narrative authority)」とどう関わるのかを検証することが本論の目的である。

## I

『トム・ジョウンズ』におけるトムとジブシーの遭遇はどういったエピソードなのか、まずその内容を検証しよう。コヴェントリへ向かうトムとパートリッジは、激しく雨が降る夜中ということもあって道に迷ってしまう。魔女にたぶらかされたのかと恐れおののくのは、いつもながらの小心者パートリッジ。そうこうするうち彼らはジブシーの一団が仲間の結婚の祝宴を開いているところに出くわす。ジブシーたちはみな楽しげで満ち足りた様子で、そこに登場する彼らの王は訛りの強い英語の語り口調が素朴に響き、とりたてて立派な服装をしているわけでもないのに、身に備わった威厳が感じられ

る人物である。愛情・信頼・敬意に立脚したまさに理想的な主従関係がここには築かれていて、トムに感銘をあたえずにはおかない。

フィールディングの通常の筆の運びからすると、ここまでの一点の曇りもないような、あまりにも出来過ぎた平和なジブシー社会の信憑性は、次に何か予期せぬ事件がおこることによって揺さぶりをかけられることが十分に予想される。理性と恩寵によって感情に打ち克てとジョウゼフ・アンドリューズに説くアダムズ牧師が、次の瞬間、自分の子どもが川で溺れたという知らせを受けて身も世もないような狂乱状態に陥る場面など然りである。また「山の男の身の上話」(VIII. xi-xiv) や「フィッツパトリック夫人の物語」(XI. iv-vii) など、それぞれもっともらしい回想談ではあるが結局のところ微妙な自己粉飾の傾向が徐々に露呈し、回想談と現実が交差するなかで語り手としての彼らの信頼度は損なわれることになってしまう。ジブシー王のエピソードでもその内容の信憑性を試すがごとく、予想通りに事件は起こる。王の歓待を受けて気が緩んだパトリッジが、ジブシーの女と戯れている現場をその女の夫に摘発されるのだ。小心者ながらお調子者でもあるパトリッジが、ジブシーの夫婦が仕組んだ罠にかかってしまったというのがどうやら真相らしいのだが、この事件に対してジブシーの王が下した裁定は、統治者としての彼の卓越性を一層印象付けるものとなる。当然の権利として慰謝料を要求する夫に対し、王は、自分の妻が不義に陥る様子を最初から見ていたにも関わらず未然にそれを阻止しようとはしないで、なおかつみずからは被害者顔をする夫を見咎めそのふるまいを厳しく非難するのである。ここでは突発的な事件によっても、ジブシー王の威厳は全く損なわれることがない。こういった公正な王のもとで生活するジブシーの民の幸福に対し、トムが賞賛を惜しまないのは当然であろう。『トム・ジョウンズ』におけるジブシー王の大岡裁きは、すぐれた洞察力と賢明さに基づくものであって、非常にフィールディング好みのものであったろうと想像されるのである。

ところが事件が一件落着となるやいなや、突然ナレーターがみずから舞台の前面に踊り出て、警告の弁舌をふるい始めるというのは意外である。彼が警戒の姿勢を見せるのは、ジブシーのこういった側面に対してなのであるか。『オックスフォード英語大辞典』(第3版)はジブシーを次のように定義

する：

放浪する人種（ロマニと自称する）の構成員でヒンドゥー人起源。16世紀初頭にイングランドにはじめて出現し、当時はエジプトから来たと思われた。濃い黄褐色の肌と黒い髪を持つ。かご編み、馬の取引、占いその他を生業とし、その遊動の生活と習慣のゆえにつねに疑いの目で見られてきた。

この「疑いの目」は、確かに『ジョウゼフ・アンドリュース』や『エリザベス・カニング事件の真相』においてフィールディングがジブシーに向けている目である。『ジョウゼフ・アンドリュース』はジョウゼフとファニーがそれぞれ「ジブシーと呼ばれる邪悪な放浪者たち」(224)<sup>3</sup>に誘拐されることで数奇な運命をたどるという設定で、ジブシーの反社会的行為のせいで失われたアイデンティティーを主人公たちが回復するというのがこの物語の筋書きである。『エリザベス・カニング事件の真相』においては、ジブシーに対するフィールディングの攻撃がさらに露骨なものとなり、エリザベスという少女を誘拐し監禁した「犯人」と目されるジブシーを、治安判事フィールディングはこのパンフレットの中で徹底的に糾弾するのである。<sup>4</sup> イギリス社会の治安を脅かす余所者、警戒を要する存在としてジブシーを位置付けるフィールディングである。

パートリッジと不倫騒動を起こすジブシーの女は「運勢を占ってあげよう」といってパートリッジを誘い出していることから、フィールディングがここに現実のジブシーのイメージをかぶせていることは明白である。さらにジブシーの王自身、ジブシーの悪い評判を承知して、「驚かれたかね。きっと我々のことを非常に悪く思っておいでだろうからね。我々のことをみんな泥棒みたいに考えておられるのだろう。」(XII, xii, 671) とトムに語っているのだ。しかしトムはその評判を一蹴するし、ナレーターもその点をあげつらうわけではない。『トム・ジョウンズ』においてナレーターが警鐘を鳴らすのは、ジブシーの反社会性や余所者性に対してではなく、このジブシーの社会が守る絶対君主制に対してなのである。ナレーターは絶対君主制が優れ

た政治形態であることをまずは認める：「どのような立憲政体も、このような専制的権力を奉じる社会と同じ水準の完成にはいたらず、同じような利益を社会にもたらすこともない」(XII. xii. 671)。しかしながら絶対君主制の唯一の難点は、残念ながら絶対君主の任に適する人物を見出すことが極めて困難なことだというのだ。優れた絶対君主には、君主としての権力に対する適切な節度と自分の幸福を知る叡智と他人の幸福を願う善良さを持ち合わせるべきなのだが、こういった資質を欠いた人間が絶対君主の地位についた時には最大の害を伴うことになるという：

結局のところ、あらゆる時代の例が示すとおり、人間というのは一般に悪をなすためにのみ権力を欲し、いったんその権力を手にいれると悪をなすこと以外の目的にそれを使うことはないのだ... 法律は感情に動かされず耳を閉ざしたものだが、それから生じるいくつかの不便を甘受するほうが、感情に振り回され聞き耳を立てた暴君に訴えることでその不便を軽減しようとするより、はるかにずっと賢明なことであらう。(XII. xii. 672-73).

要するに、このジブシーたちの社会に見られた絶対君主制を単純に理想とするのは危険で、そういった政体よりは杓子定規な法治国家のほうがましだとナレーターはいうのである。

ジブシーの王の仕切るユートピア世界が、一歩間違えば非常に危険なものであることをナレーターは強調するのだが、それでも実際のところ小説の中では一歩の間違いもおこってはいない。ここに描かれたジブシーたちの社会は疑いなく理想郷と呼びうるものなのである。ここでのナレーターのコメントは、展開するエピソードの内容そのものには全くそぐわないといわざるをえない。ジブシーに対する共感と警戒　この拮抗する二つのモードをどう解釈すべきだろうか。

## II

ジブシーの王との遭遇のエピソードについては、批評家パティスティンが

その政治的な意味合いを論考「トム・ジョウンズとジブシー王：フィールディングの政体の寓話」(“Tom Jones and ‘His Egyptian Majesty’: Fielding’s Parable of Government”)において十全に分析している(69-77)。つまりイギリスの立憲君主制 (limited monarchy) と対比されるジブシー社会の絶対君主制 (absolute despotism) は、ジャコバイティズムと通じるものと位置付けられるのであって、このエピソードはトーリー / ジャコバイトの絶対主義に対する攻撃であるというらえかたである。<sup>5</sup> たとえば王権神授説を批判したジョン・ロック (John Locke) や、広教会派主教でありホイッグ政権の擁護者として『現体制の幸福と絶対君主制の不幸』(*The Happiness of the Present Establishment, and the Unhappiness of Absolute Monarchy*, 1708) と題する説教を残したベンジャミン・ホードリー (Benjamin Hoadly)<sup>6</sup> の考え方に大きな影響を受けたとされるフィールディングであってみれば、絶対君主制を礼賛することに待ったをかけるというのは大いに理解できることである。しかしながら絶対君主の権力は一歩間違えば非常に危険なものになりかねないという『トム・ジョウンズ』のナレーターの声高な警告とは裏腹に、ただしその権力は一歩も間違ふことなく適正に行使されるならば賞賛に値するのだという、その稀代の可能性をフィールディングは見限ってはいないのではないだろうか。

ジブシーの反社会性・余所者性に対するフィールディングの警戒心が『エリザベス・カニング事件の真相』などに強く現れていることは既に述べたが、古代エジプト社会の政体についてはこれを賞賛する傾向が『トム・ジョウンズ』以外の書き物にも見出せる。大蔵大臣ヘンリー・ペラムに宛てた『貧民に適切なる食をあたえ、彼らの道義心を正し、彼らを社会有用の民たらしむるための建言』(*A Proposal for Making an Effectual Provision for the Poor*, 1753) においては、犯罪まみれの墮落した社会を建て直すために、社会の各層が自分の持ち分の仕事を責任をもって果たすことを求めると同時に意欲ある貧者に仕事をあたえることを提言しているのだが、現実のジブシーなども見据えてか、「浮浪者は人体の余分な体液と同様、完全に排除されるべきである。つまりつばや汚物なのであって、なんの役にもたたないのだから、人間性の力によって外へ出されるというわけだ」(227) と言い放つ一方で、多数の有

為の人間に支えられた理想的な“Perfection”の社会として、同時代のオランダとともに古代エジプトの政体(226)を例にあげている。また『クラフツマン』紙(*The Craftsman*, 1737)の第589号(1737年10月22日付け)にも「古代エジプト人たちの理想的な国家」と題した記事を載せ、ディオドロス・シクロスの著作に即して古代エジプト人のことを「人生を有用で幸福なものにする国家の真のありかたを理解した初めての人々」(256)と呼び、その王が他の君主たちより一層厳格に法を遵守するということを、尊ぶべき特徴としてあげている。

そういった直接的な現れ方とは別に、『トム・ジョウンズ』全体の流れをみた場合にも、ジブシーの絶対君主制という政体に対する共感がいろいろな面であらわれているように思われる。そのひとつは、フィールディングにみられる大衆に対する根強い不信感である。絶対君主がけしからんならば共和制であるべきなのかと問えば、後者に対するフィールディングの評価は決して高いものとは思えない。『トム・ジョウンズ』第1巻で使われた“Mob”という単語には原注がつけられている：「この語が我らの著作にいつ出てくるにせよ、これはすべての身分の、徳も分別もない人間を意味するものである。しばしば最高ランクの多くのひとたちのことも意味するのである」(Lix.59)。大衆は、愛する妻の死を冷静に受け止めようとするオールワージの高尚な思いを理解できずに、彼の分別や宗教心や誠実さを揶揄したりするし、ジェニー・ジョウンズ(トムの母親と信じられていた)に対するオールワージの対応が厳しすぎるとか甘すぎるとか無責任にも勝手な陰口をたたく烏合の衆である。そういった連中の節操の無さは『トム・ジョウンズ』全編通じて救いようの無いものとして描かれている。『コヴェント・ガーデン・ジャーナル』紙(*The Covent-Garden Journal*, 1752)の第57号に於いてフィールディングがこういった大衆のことを“the fourth Estate”(259)<sup>7</sup>と呼び、聖職者・貴族・平民のさらに下に位置づけているのをみても、大衆に対するフィールディングの不信感の強さが察せられるのである。

そういった大衆の対極に位置するのがオールワージであろう。たとえばプリフィルの本性がなかなか見抜けなかったり、ジェニー・ジョウンズやパートリッジに対する治安判事としての判断が公正さを欠き必ずしも適正でなか

ったりといったように、その判断力・洞察力には限界もあるのだが、それでも人間としてのオールワージの信頼度は『トム・ジョウンズ』においておそらく最も高く、その存在は肯定的に描かれている。場当たりの方策をとることも大衆の意向に迎合することもしないで、オールワージは自分の良心・信条に従った言動を旨としているからである。ナレーターはオールワージについて「彼の意図はまことに高潔であったから、良心の法廷では彼は当然許されるはずである」(IV. xi. 192) と言うのだが、<sup>8</sup> たとえ人間として完璧ではなくとも、オールワージは理想的な絶対君主像に非常に近い「家父長」的な存在といえよう。ナレーターが、「どのようにすれば、神がつくりたもうた人間たちに最善をなして、神の御旨に最もかなうようになれるかを考えてやまない、慈愛に満ちた人間」(I. iv. 43) と描写するオールワージの姿は、まさにジブシーの王を彷彿とさせるものなのである。

批評家バティスティンの議論は、フィールディングが反ジャコバイトの立場に立つものという前提にたち、イギリスの立憲君主制と対比されるジブシー社会の絶対君主制はジャコバイティズムと通じるものであるから、フィールディングはジブシーに対し警戒の姿勢をとるのだというものであった。この見解が興味深いのは、そもそもの前提をひっくり返すことによって、ジブシーに対するフィールディングの姿勢もまた違ったものに見えるということである。フィールディングは『トム・ジョウンズ』とほぼ同時期に執筆したジャーナルやパンフレット類において確かに表向き反ジャコバイトの顔を見せているが、『トム・ジョウンズ』ではひそかにジャコバイトに対する共感が潜むようにもとらえられないだろうか。たとえばウェスタンやパートリッジといったジャコバイト派の主要登場人物が、数々の弱点を備えながらも愛すべき愉快な人間として描かれている一方で、ジャコバイトの反乱軍制圧に向かう兵士たち、特にノーザトンなどは低級なごろつき同然の輩である。反ジャコバイト主義者「山の男」はその厭世観がひとりよがり、主人公トムにとっての反面教師としての位置付けとなっている。そしてなにより、王位奪還を目指すチャールズ・エドワード・スチュアートの容姿の美しさと彼が醸し出す悲運の王子としての神話性あるいはカリスマ性は、フィールディングの作中人物であるトム・ジョウンズのイメージとみごとに重なるのであ

る。<sup>9</sup> ボニー・プリンス・チャーリーとトムは、さまざまな苦難を経ながら自分の居場所を求めて放浪するという点で相通するのであるが、さらにその放浪のさまはジブシーとも一脈通じるところがあるのではないか。

### III

ジブシー社会の絶対君主制がはらむ危険性をナレーターが声高に警戒するにもかかわらず、『トム・ジョウンズ』には賢明な絶対君主的統治者に対する憧憬モードが残ることを前章で考察した。ジブシー王が体現するそういった統治者像がオールワージに投影していることは既に述べたが、オールワージよりさらにその血統を強く分かち持つ存在がこの小説には見出せる。ほかでもない、この小説のナレーターが持つ権力 (narrative authority) こそはジブシーの王によって行使される適正な権力に通じるものと思われるのだ。

自分の存在を強くアピールするナレーターの存在は、小説『トム・ジョウンズ』の一番の醍醐味と言っても過言ではないだろう。自伝の形を装うことで実話としての信憑性を獲得するため、いわゆる一人称の語りが大勢を占めていた当時の小説のなかで、フィールディングの三人称のナレーターはひときわ異彩を放つ存在であった。第1巻第1章において早くも「精神の娯楽の優秀さは、主題よりも作者の技量によるのである」(I. i. 33) と言い切るナレーターであってみれば、単なるストーリーの語り部としておさまるわけもない。臆することなくしばしばストーリーの進行を止めては自分の信条・方針を得意げに開陳するのである。そういった脱線について「どんなあわれむべき批評家などより、私自身のほうがずっとすぐれた鑑定家なのである」(I. ii. 37) と述べて批評家連の口出しを封じたり、たとえばオールワージの妹ブリジェット嬢が素性のわからぬ赤ん坊の世話を兄に命じられて承諾することについて、彼女の意図を解説する際に「これはほとんどの読者にとっては独力で観察するのが難しい深みのあることだから、私が読者に手を貸すのが適当と考えたのである」(I. v. 47) と付言することで、自分が読者の理解の上位にたつことを偉そうに主張して、自己の統制力をアピールするナレーターなのである。

しかしながら『トム・ジョウンズ』のナレーターの特徴は、一方で読者に

対して偉そうに振舞いながらも、読者の能力および自立性を尊重する態度をみせるという点である。第2巻の第1章ではこの作品がいわゆる歴史書とは性格を異とし、時間の進行が恣意的なものとなっていることを弁解した上で、次のように述べている：

実際、私は文学における新しい領域の開拓者であるから、そこでもってどのような法を作ろうと私の自由である。我が読者よ、きみたちは私の臣下なのだから、この法を正しいと信じまた守らねばならない。読者がすぐさま喜んでそれに応じるよう、私はこういったすべての法の制定にあたっては読者の安寧と利益を一番に考慮することをここに確約するものである。というのも私は王権神授の暴君のように読者のことを我が奴隷、我が所有物と考えるものではないからである。(II. i. 77-8)

言い回しは微妙である。ナレーターはみずからを「文学における新領域の開拓者」、そして読者は彼に従うべき「臣下」とする。とは言いつつも自分は「王権神授の暴君」ではないのだから読者を自分の「奴隷・所有物」と考えているわけではないと言うのだ。ここでいう「王権神授の暴君」とは、ジブシー王の挿話の際にナレーターが警戒心を露わにした、賢王にふさわしい資質を欠く横暴な絶対君主に近いものであり、ナレーターはみずからがそういう種類のものではないことを言明しているのである。

実際ナレーターは読者の理解・判断を尊重し、読者が小説世界の構築作業に参加することを勧める姿勢を見せている。たとえばストーリーの時間的流れが飛ぶような場合には、読者が想像力を駆使してその間隙を埋めるべしと主張する：「我々はこういった場合には読者に対して彼が自分自身の推測でもってこのような空白の期間を埋めることにより、彼が所有するあのすばらしい判断力を使う機会をあたえるものである。そういった目的のために我々はもっと前の箇所読者に能力をあたえるよう気を配っている。」(III. i. 116) ソフィアを初めて登場させる際にみずからが駆使してみせる大袈裟な古文調に酔いつつも、すべてを自分が解説してしまうことを控えるあたりもそつが

ないナレーターである。「いや、それは読者の理解力に対する暗黙の侮辱であり、彼女 [ソフィア] の人物像を形成するに際しての喜びを読者から奪ってしまうことにもなりかねない」(IV. ii. 157)。読者の存在を尊重し、彼らとの共同作業の必要をくりかえし強調するナレーターなのである。

読者こそが判断の主体となるよう後押しする姿勢をみせるナレーターの手管はかなりしたたかである。トムに対するプリフィルの密かな企みや同じくトムに対するソフィアの繊細な思いなどについてナレーターは「我々は間違っている可能性がちょっとでもある場合には、人間の行動に対してその動機を断定することは決してしない」(V. x. 258) といったような言い方で動機の解明を控え読者に自由な判断を許すのだが、それぞれの場面に到るまでに登場人物の十分な性格付けをおこなっているので、読者の判断がさまざまに分かれることは到底ありえない。「読者に受身の姿勢をとらせないよう誘導すること」も含めて、ナレーターがこの小説の道徳的中心に座してすべてを仕切っているのには違いなく、読者はナレーターが敷いたレールの上をナレーターに誘導されながら進んでいることを自覚せざるを得ないのだ。小説最後にあきらかになるトムの出生についての真実は読者にとってはどんでん返しの結末となるわけだが、筋書きすべてを知った上でこの小説を再読すると、そのどんでん返しよりももっと大きな驚きを読者は発見することとなる。小説冒頭でブリジェット嬢が赤ん坊トムに示した愛情は、このどんでん返しの結末とむすびつくものであったことが再認識されるのだが、その最初の時点でナレーターがぬけぬけと「これがたとえ彼女の本当の子供であったとしても、これ以上のことはできなかつただろう」(I. v. 46) などと述べていたのは、ほとんどの読者が読みすごしていたに違いないところである。読者は自由に判断することを許されながらも、ナレーターの導きに従う形で小説を読み進んできたのだが、しかもなお最終的にはナレーターに一本とられた思いをするのである。ナレーターの権力がすべてをコントロールする仕組みがここには厳然とあるのだ。

巧みに自分の世界を統治する「賢王」としてのナレーターは読者をどのように見るのか。

実際のところ、私はただ読者のためにいるのであり、彼らの役にたつよう創られたのであって、彼らが私の役にたつよう創られたわけではないのだ。読者の利益こそを我が書き物の大原則とする限り、読者は全員一致で我が威厳を支持し私が受けて当然の名誉、また私が望む名誉すべてを私にあたえることに同意してくれるだろうことを信じて疑わない。(II. i. 77-8)

結局のところ、臣下(読者)の安寧・利益に寄与すべく統治する賢王として、これはジブシー王の姿と重なってはいまいか。ジブシー王も、非常に似たようなことを主張していたのが思い出されるのである：

…私は彼ら [ジブシーの民] のためになること以外を考えるものでは決してありません。といってそれを自慢するつもりもない。というのも、自分たちが手に入れたもののうち最も良いものをいつも私に差し出そうと、一日中歩き回っているあの哀れなものたちのためを考える以外、私に何ができるでしょうか。私が彼らのことを愛し世話をすから、彼らも私を愛し敬ってくれるのです…(XII. xii. 668)

## 結び

観念的に記号化して、フィールディングはジブシーに二つの面を見ている。イギリス社会と相対する位置にあるジブシーは、社会の安定を揺るがす異分子として警戒の対象となるのだが、ジブシー(古代エジプト)社会そのものがもつ政治形態は、非常に理想化されるのである。こういったジブシーに対するフィールディングの警戒と賞賛は、裏返せばイギリス社会に対する彼の愛国心と失望に対応するともいえるだろう。フィールディングは若かりし頃、体制批判で名をあげた人気劇作家であったが、晩年は治安判事として社会の秩序維持に努力を傾注した。これは必ずしも矛盾や転向を示すわけではなく、彼の愛国心と国に対する批判精神が裏腹であったことを示唆しており、それがジブシーに対する見方にも反映していると思われるのである。イギリス社会を守るべき良きものとみた場合にはジブシーのような余所者に対する警戒

心が起こるし、墮落したイギリス社会への失望が高じると、安定したジブシー社会の秩序が賞賛されるという具合である。つまりフィールディングにとってジブシーは絶対的な価値を持つ存在ではなく、イギリスのこういった面と比較するかによって意味合いが異なってくる相対的な存在なのである。

政治形態としては絶対君主制こそが最良であると認めながらもジブシー社会にみられる絶対君主制に対しフィールディングが警戒心をみせたのは、絶対君主の任につくべきでない人物がその位置についた場合の危険性を慮ったことであった。ベストの政治形態に付随するかもしれないリスクを避けるために、セカンドベストとしての立憲君主制を選ぶ現実主義者フィールディングである。しかしながらそれはさらに共和制の方向へ進むことを目指す選択というよりは、理想の絶対君主制に対する羨望をひきずりながらの、いたしかたなしの選択である。英国においては現実化し得ない理想的な絶対君主制をジブシー王のエピソードで描き出すと同時に、その可能性の片鱗をオールワージという作中人物に体現させつつ、みごとな統括者であるナレーターの話りによって肯定するフィールディングなのである。

## 注

1 往時“Egyptian”というのはジブシーを指す言葉として公的に法律にも使用されていた。ヘンリー八世やメアリー一世、エリザベス一世らによって出された法令にも、ジブシーの行動を制限するくだりがみられるが、そこでもジブシーは“Egyptians”と呼ばれており、フィールディングは『近時漂盗の激増せる原因の調査についての建言若干』(*An Enquiry into the Causes of the late Increase of Robbers*, 1751)の中でたとえばヘンリー八世時代の法律を次のように引用している：「Egyptians と自称するものたちは入国させない。違反すれば持ち物を没収する。命令されてから15日以内に立ち去らない場合は、彼らを投獄する。」(137) アンガス・フレーザー (Angus Fraser) によると、イングランドの法律で「エジプト人」のかわりに「ジブシー」という言葉を使った最初の例は1713年の法律だったということである。(136)

2 批評家バティスティン (Martin C. Battestin) は、フィールディングに影響をあたえたと考えられる同時代の著作について、シャルル・ロラン (Charles Rollin) の *The Ancient History of the Egyptians . . . and Gecians* (1738-40) やチャールズ・ペリー

(Charles Perry) の *A View of the Levant* (1743) などあげている。(“Tom Jones and ‘His “Egyptian” Majesty’: Fielding’s Parable of Government”, 71)

3 本稿での引用の翻訳は筆者自身によるものである。ただし『トム・ジョウンズ』については朱牟田夏雄氏による名訳を参考にさせていただいた。また『トム・ジョウンズ』からの引用箇所は原著の巻・章・ページを、その他の著書からの引用はページのみを本文中に略記するものとする。

4 『エリザベス・カニング』の中には次のような記述がみられる：「往来強盗やジブシーは人間の姿にも程遠く、なんの動機もなしに無茶苦茶な残虐行為するという罪を犯し、世の中を震撼させている。」(292) ジブシーに対するこういった見方はフィールディングに特有であったわけではなく、たとえば『スペクテイター』の130号(1711年7月30日付け)にも怪しげな占いをしたり子供を誘拐したりするジブシーについての記述がある。

5 ジブシーとジャコバイトをむすびつけるというのは決して広く流布したとらえかたではなかったが、アンガス・フレーザーはW. スコットの物語詩『ガイ・マナリング』の主人公メグ・メリリーズのモデルとされたジーン・ゴードンというジブシーが、1746年頃にカーライルでジャコバイトであるということから群集により水漬けにされ殺されたが、死ぬまで気位を失わず、息を引き取る瞬間までプリンズ・チャーリー支持を叫んでいたとされるエピソードを引いている(*The Gypsies*, 141-42)。フィールディングがジブシーとジャコバイトをむすび付けている例は『ジャコバイト・ジャーナル』の第15号(1748年3月12日)にかろうじて見出せる。ここでは“The Genealogy of a Jacobite”という小見出しのもと、ジャコバイトとジブシーがひとつの脈絡のなかに置かれているのだが、このむすびつきをどの程度重視すべきかは疑問である。“The Devil begot Sin, Sin begot Error, Error begot Pride . . .”で始まる長文は、途中“Infallibility begot the Pope and his Brethren in the Time of *Egyptian* Darkness . . .”と続き、それがさらに“Discontent begot a Tory, and a Tory begot a Jacobite . . .”(194)とつながるといって過ぎないのだ。

6 ホードリーについては、その書物を『ジョウゼフ・アンドリュース』の中でアダムズ牧師が「天使の筆で書かれたもので、キリスト教およびその神聖な儀式の真の目的を回復するを意図したものと絶賛している。

7 “Mob”(大衆)について『トム・ジョウンズ』のナレーターは次のようにもいっている：

さて、この大衆とどの程度であれ親しくするのを許される光栄をもった者なら誰にせよ、この大衆の確立した処世訓の一つが、富める隣人から躊躇なく横領し掠奪せよというのであることを、また、彼らの間ではそれが罪とも恥とも考えられていないことを、知っているにちがいない。(XII. i. 620)

8 「良心の法廷」といういい方はフィールディングがしばしば使うものである。『トム・ジョウンズ』には他に次のような例がみられる：「本当のところ、醜酷

というのは司法の法廷では言い訳にはならないが、良心の法廷においてはおおいに言い訳となるのである。」(V. x. 257); 「他人の持ち物を見つけても、それをわざと持ち主に返さず自分の手元に留め置くひとは、良心の法廷においてはそれを盗んだひとと同然、絞首刑に値する。」(XII. xiii. 676). 『エリザベス・カニング事件の真相』では、治安判事としてカニング擁護の側に立ったフィールディングだが、形勢が不利であることを察知して次のような自己弁護を展開している：「厳肅なる真実であるが、私は自分が正しい側にあるということを別に望んではないので、自分が間違っているということが判明しても少しも不快に思うものではない。」(311.) 治安判事として正しい判断をくだすということよりも自分の良心に従ったということで自己満足の評価をするフィールディングである。

9 『トム・ジョウンズ』におけるジャコバイティズムについては、以下の拙論を参照のこと：「フィクション化された歴史 『トム・ジョウンズ』におけるジャコバイティズム」『主流』(同志社大学英文学会、2000年3月)第61号、15 - 32 .

## 引用文献

- Battestin, Martin C. "Tom Jones and 'His Egyptian Majesty': Fielding's Parable of Government", *PMLA*, 82 (1967)
- Bond, Donald F. (ed.). *The Spectator*. Oxford: The Clarendon Press, 1987.
- Fielding, Henry. *A Clear State of the Case of Elizabeth Canning in An Enquiry into the Causes of the Late Increase of Robbers and Related Writings*. Ed. Malvin R. Zirker. "The Wesleyan Edition of the Works of Henry Fielding." Middletown, CT: Wesleyan UP, 1988.
- \_\_\_\_\_. *The Covent-Garden Journal in The Covent-Garden Journal and A Plan of the Universal Register-Office*. Ed. Bertrand A. Goldgar. "The Wesleyan Edition of the Works of Henry Fielding." Middletown, CT: Wesleyan UP, 1988.
- \_\_\_\_\_. *An Enquiry into the Causes of the Late Increase of Robbers in An Enquiry into the Causes of the Late Increase of Robbers and Related Writings*. Ed. Malvin R. Zirker. "The Wesleyan Edition of the Works of Henry Fielding." Middletown, CT: Wesleyan UP, 1988.
- \_\_\_\_\_. *The History of Tom Jones a Foundling*. Eds. Martin C. Battestin and Fredson Bowers. "The Wesleyan Edition of the Works of Henry Fielding." Middletown, CT: Wesleyan UP, 1975.
- \_\_\_\_\_. *Joseph Andrews*. Ed. Martin C. Battestin. "The Wesleyan Edition of the Works of Henry Fielding." Middletown, CT: Wesleyan UP, 1967.

\_\_\_\_\_. “On the Ideal Government of the Ancient Egyptians” in *The Craftsman*, No. 589 (22 October 1737), in *New Essays by Henry Fielding: His Contributions to the Craftsman (1734-1739) and Other Early Journalism*. Ed. Martin C. Battestin. Charlottesville, VA: The University Press of Virginia, 1989.

\_\_\_\_\_. *A Proposal for Making an Effectual Provision for the Poor in An Enquiry into the Causes of the Late Increase of Robbers and Related Writings*. Ed. Malvin R. Zirker. “The Wesleyan Edition of the Works of Henry Fielding.” Middletown, CT: Wesleyan UP, 1988.

Fraser, Angus. *The Gypsies*. Oxford: Blackwell, 1995.

## Henry Fielding and His Egyptian Majesty: the Parable of Authority in *Tom Jones*

Yuko ENGETSU

Key words: Fielding, authority, Egyptians

Among many episodes in *Tom Jones*, that of the Egyptian Majesty (virtually a gypsy king) is unique in that the content of the story does not accord with the narrator’s comment on it. Tom happens to meet the gypsies on his way to Coventry and finds that they have established a peaceful and happy society under their king with absolute authority. Taking good care of his subjects and passing fair judgment on their troubles, the king wears a natural air of dignity. Tom is impressed by this apparently ideal government and pays profound respect to the king. After this episode, however, the narrator adds his own comment on how dangerous arbitrary power could be, as if admonishing us not to share Tom’s admiration for the gypsy king’s government.

The narrator agrees that “no limited Form of Government is capable of rising to the same Degree of Perfection, or of producing the same Benefits to Society with” the government of arbitrary power. The crucial difficulty

he points out is of finding any man adequate to the office of an absolute monarch. The narrator insists that absolute authority in the hands of one who is deficient in moderation, wisdom or goodness is likely to be attended with evil, and that we should content ourselves with the second best system of government: the constitutional monarchy.

While the narrator, Fielding's surrogate, sounds very negative about absolute authority, there remains his longing for the possibility of ideal government by that very authority. We find Fielding's admiration for the policy of old Egyptians, who used to be regarded as the ancestors of gypsies, in some of his journals; he calls the ancient Egyptians "the first People, who understood the true Nature of Government, which is to render Life useful and happy." After all, Fielding's idea of the social order is rather conservative; he does not necessarily trust the systems of democratic forms of government, even when he chooses a constitutional monarchy rather than an absolute monarchy. Not trying to control his feeling of hatred toward the ignorant and shameless "mob", Fielding successfully makes the character Allworthy a patriarchal figure like the gypsy king, an ideal absolute monarch.

The value of the gypsy king is reflected not only in Allworthy but also in the narrator himself. In saying, "I am at liberty to make what Laws I please therein. And these Laws, my Readers, whom I consider as my Subjects, are bound to believe in and to obey," the narrator sounds very arrogant. In spite of his provocative attitude toward readers, the narrator esteems readers' judgement none the less, and urges them to take part in constructing the meaning of the story. The narrator says, "For I do not, like a *jure devino* Tyrant, imagine that they [readers] are my Slaves or my Commodity. I am, indeed, set over them for their own Good only, and was created for their Use, and not they for mine. Nor do I doubt, while I make their Interest the great Rule of my Writings, they will unanimously concur in supporting my Dignity, and in rendering me all the Honour I shall deserve or desire."

These words of the narrator's sound exactly like those of the gypsy king, who says, "dis me can say, dat me never design any Ting but to do dem [my subjects] Good."

As a realist, Fielding chooses a constitutional monarchy to avoid any risk that may arise from an absolute monarchy. Behind the choice, however, lies his deep admiration for an absolute monarchy by an ideal king. It is in the functions of his fictional figments—the character Allworthy and the narrator—that Fielding realizes his admiration for an absolute monarchy.